



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第2回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

内なる対話のはじまり

先月号の原稿が印刷に回った頃、ある新聞記事が目にとまりました。「過激派と対話の試み、テロ排除に宗教者ら若者を説得」という見出しです（『朝日新聞』二月二十三日朝刊）。インターネットの過激派サイトで危険な主張を発信する人々に、イスラム法学者たちが対話呼びかけ、暴力でなく平和をこそ目指す真のイスラムの教えへと若者たちを導いている、と報じられています。「宗教の内

部で教義をめぐる論争がもつと盛んになれ

ば」と書いたことが、まさに現実となったよ
うで、嬉しく思いながら読みました。
このような試みには、もちろん多くの限界
がつきものでしょう。その報道自体にも、バ
ランスの取れた見方が必要かもしれません。
しかしそれでも、不十分な信仰理解がもて
過激な暴力思想へと引つ張られてゆく若者た
ちに、イスラム信仰そのものに発する確信か
ら平和を語りかける努力が続けている——そ
ういう宗教者たちがいることを知るのには、や
はりとても希望があつて力づけられるニュー
スだと思います。

ところで、これは明らかに、この人々だか
らこそできる対話です。イスラム信仰の外に
立つ者が、かりにまったく同じことを語って
も、彼らの耳には届かないでしょう。いや、
かえって逆効果を生んでしまうかもしれませ
ん。自分たちが信仰の権威と認める人々の言
葉だから、彼らも耳を傾けて考え直す気にな

るのです。世間では「宗教間対話」の必要が
よく叫ばれますが、わたしの見るところでは、
そのような対話はお膳立てが難しく、なか
なか思うようにはゆきません。それよりも、
まずはこうした「宗教内対話」があちこち
進むことが、少しずつでも現状の改革をもた
らしてくれるのではないかと思います。

それと、もう一つこの記事から学べること
があります。それは、単純なことですが、信
仰のかかわる問題の解決には、やはり信仰の
かわりが必要だ、ということ。宗教の
問題に、世俗の解決をあてはめるのでなく、
その宗教の内部にある源泉にもう一度立ち帰
ることで、解決を導き出している——それが、
わたしにはとても貴重なことに思えます。

わたしたちは、こうした問題の根深さに恐
れを抱くあまり、宗教の関与する度合いをな
るべく薄めておいたほうがいいのではないかと
思ってしまう。たとえば、宗教という

信仰のかかわる問題の解決には、信仰のかかわりが必要です。

宗教の問題に、世俗の解決をあてはめるのでなく、

その宗教の内部にある源泉にもう一度、

立ち帰ることで解決を導き出していくのです。

わたしは、このような力をもつ教えが、どの宗教でも

きつとどこかに貯えられていると思います。

のは、各人の心の中の問題なのだから、人々の集まる公の場所にはみだりにそれを持ち込まないでほしい、とつい考えたくありません。

「政教分離」という考え方も、日本では何となくこういう発想で済ませているところがないでしょうか。

けれども、この対話を続けている人々は、過激な信仰へと傾いた若者に、「政教分離」

や「寛容」の理念を説いたわけではありませ

ん。新聞の記事によれば、はじめ「不信仰者や圧政者と戦う」ことを使命と感じていた若

者たちは、一か月にも及ぶ長いやりとりの末に、「私は神が定めた正しい道に戻ることを

誓う。神のみを信じ、恐れる。全能の神は、禁じられた流血に私が手を染める前に私をお

救いになった」と語るようになっていきます。

信仰の熱心さは変わりませんが、今やそれが、暴力や流血を抑止する力へと変えられているのです。

わたしは、このような力をもつ教えがどの宗教でもきつとどこかに貯えられていると思

います。歴史の変遷をくぐり抜けて伝えられ、鍛え抜かれて今も広く信じられている宗教に

は、それだけの理由があります。さまざま

新しい状況に直面して、多くの失敗を重ねて

学び、修正と変革を重ねてきた結果が、「伝統」となってそれぞれの宗教の「今」を形作

っています。「新しい時代に合わない」と捨ててしまふには、あまりにもつたない蓄積がそこにあります。

必要なのは、井戸をもう少し深く掘る努力です。そうすれば、わたしたちは必ず清冽な水を新たに汲み直すことができます。渇いた現代人に必要な潤いと癒しをもたらすことができます。

「原理主義」と呼ばれる人々の考え方は、キリスト教やイスラム教に限らず、現代世界ではさまざまなところに顔を出します。彼らに共通しているのは、自分の存在が何ものかに「脅かされている」と感じていることです。その脅かしの元は、近代に大きく発展した批判的学問や科学技術であったり、グローバル化して有無を言わずに迫ってくる世界経済システムであったり、あるいは自分たちの宗教的理念と相容れない文化価値による侵食であったりと、いろいろです。

その彼らに向かつて、わたしたちが近代の世俗原理に基づいた寛容を説いたりしたら、どうでしょうか。どんなにそれが善意と敬意に満ちたものであっても、相互理解や世界平和を説くわたしたちの声は、彼らにとってはもう一つの新たな脅かしにしか響かないかもしれませぬ。冒頭の報道は、その意味でも大切なことを教えてくれていると思います。

対話は、みずからの内なる対話にはじまる